



餅つき名人

大井 郁夫さん (59歳) 東雲

中学生の頃に父親から餅つきを教えられ、高校生時代には「一人前に餅がつけるようになってきた」という大井郁夫さんは、一度に素早く二十五臼も平気でつき上げる。まず杵による「練り」が肝心だ。蒸しあげたもち米の山が大井さんの手にかかる、あつという間に平らになる。普通は臼の周りを五回から六回ほど回りながら練るが、大井名人だとわ

ずか三周。全体重をかけるのがコツ、という。「練り」が完璧に出来ていると次の「つき」の時間が短くなる。愛用の軽めの杵で楽々ついて完成だ。「つき」のコツは「杵を下ろした最後は野球のバットを握るようにすること」。

餅つき名人になるための最後の決め手は、どうやら器用さや体からしい。これまで餅つきを育成会やPTAのバザーで披露してきたほか、地域の子供にピエロ

の衣装を着てバルーンアートを教えてきた。わが子の野球やサッカーの応援のためなら一日に1200kmの運転もしたし、毎朝10kmの走り込みを楽しんでいた。大井さんは「負荷のかりすぎだ」とホームドクターに止められた。今でもスポーツクラブでのトレーニングは欠かさない。

大井さんは高校生時代にバスケットボールの選手だった。身長に恵まれなかったが、スリーポイントシュートを得意にしていた。就職後はスキーに転向し、一級に続けてクラウンプライズ（急斜面不整地での技術資格）の認定を受け、芝スキーインストラクターの資格も取った。結婚前後に持っていた四着のスキーウェアの内「一番気に入っていたのが、青空を背景に見栄えのする白のウェア」と話す。純子さんと結婚して旅行先を選んだのはカナダ。二人で新雪の上を滑ってきた。

二人はその後、四人の男児に恵まれ、その四人ともが野球やサッカーで大学や実業団のチームで活躍した。純子さんは家に食べ盛りの子が大勢いた頃、朝に晩に一升の米を炊き、カレーや煮物は市販で最大のアルマイトの鍋で作った。当時を知る親しい人は「家に田んぼや畑があったからこそ皆、大きく育った」と話す。大井さん一家は大会出場を果たした息子や兄弟の応援のために、高校野球の甲子園と大学野球の神宮球場の両方に駆け付けた。

大井郁夫さんの愛車は軽のダンプカーで、これはグラウンド整備に尽くした思い出の車だ。今は臼と杵を積んで出掛けて仲間と餅つきを楽しんだり、愛用のスキー板四組を載せたりしている。四組は滑るコースと雪質による使い分けのため。ダンプカーをキャンピングカーに替えて、旅行をしながら息子四人の家を回るという将来の夢もある。ただし今は東北福祉大野球部員で、プロ入りを目指している四男の夢の実現を応援している。

(取材・文 佐藤 万千子)

ゆらさんの四季の薬膳

元気が出ないときの切り札

春がそこまでやってきているのに元気が出ない。長い自粛生活の副作用かもしれない。そんな、そうでなくとも陰の世界から陽の世界に変わる春先は体調を崩しやすいとき。今回はそんなときの切り札をご紹介します。私の大先輩が愛用していたスツポンスープです。正確には「スツポンスープのニラ玉小鍋」。スツポンなんていわず、体力回復の一手として活用してみてください。

【材料】 スツポンスープの缶詰1缶、木綿豆腐1丁、ニラ1束、むきエビ5尾、卵2個、みりん小さじ1、塩ひとつまみ。

【作り方】 小鍋にスツポンスープをあげ、卵以外の材料をすべて入れ煮立てる。最後に溶き卵を回し入れれば出来上がり。

スツポンは腎臓の働きの低下、体力低下、老化、耳鳴り、不眠、リンパ節の腫れ、肌の衰えにも効果的で、コレステロール値を下げる働きも。スープ缶はネットでも簡単に手に入るの、ぜひ春の冒険を試してみてください。

(国際中医薬膳師 小清水由良)



右端が餅つき名人の大井郁夫さん。中央が妻純子さん。長男高将(たかまさ)さんとその家族。二男佑磨(ゆうま)さんとその家族。三男恵太(けいた)さん四男光来(みつぎ)さん。孫は全員女兒。